

4-1. 少年柔道の実態調査

茨城大学	尾 形 敬 史
講道館	小 谷 澄 之
"	佐 藤 義 治
鹿児島大学	松 永 郁 男

I はじめに

少年柔道は従来より成人一般の柔道と同様に広く行われており、特に最近では少年団活動の隆盛などもあって子供の柔道愛好者は年々増加する傾向にある。このように少年柔道は盛んに行われているわけだが、一方では少年柔道は如何にあるべきか、練習の量や質の問題、また躰や人間形成の問題等々、発育発達の著しい時期における柔道練習のあり方、指導のあり方について従来より論議されるところである。しかしながら、これら少年柔道に関する研究は数が少なく、研究の緒についての段階といえる。

少年柔道の研究課題は、まず少年柔道ということばの定義から始まって、柔道練習が子供達に与える生体負担度の測定や技術的な指導法の確立など様々な問題が考えられるが、我々は、自分達も現場の指導者として少年柔道に携わる者として、少年柔道の実態を把握することが研究の第一歩と考え、少年柔道の実態調査をおこなうこととした。

なお、少年柔道の範囲は講道館少年部などでその指導対象としているものを対象とした。すなわち、講道館では学齢期に達した小学一年生から中学三年生までを少年部としているが、調査の対象も中学三年生以下とした。

II 方 法

調査は1979年および1980年の二ヶ年にわたっておこない、1979年は主として東京都内、1980年は東京以外の全国を対象とし、郵送による質問紙調査法を用いておこなった。

調査の内容は、別紙調査用紙に示すように次の5項目に大別される。

- (1) 練習生について
- (2) 指導者について
- (3) 指導計画について
- (4) 指導内容について
- (5) 施設について

調査対象は、1979年の場合は東京都内における予め調査した少年柔道を指導する施設（道場、体育館、警察署、中学校、その他）であり、1980年の場合は全国道場名簿および全日本柔道少年団名簿により、重複をさけて東京を除く全ての施設・団体とした。なお、対象選択の方法について、1980年では特に中学校をその対象から割愛したが、それは次のような理由による。まず、中学校では正課体育や必修クラブ、部活動などによって広範に柔道が行なわれているが、おおよそ文部省の指導要領にそって指導がされており、全国的に共通な姿が予想されることと、学校によって必ずし

も柔道を正課や部で実施している訳ではなく、実施しているか否かの識別が全国を対象とする調査では非常に困難であるという点による。

回収率は、1979年が総発送数270に対し回答数149（55.2%）であり、1980年は総発送数1,435に対し回答は665のうち20が道場閉鎖のため純回答数645（44.9%）であった。今回まとめるに当って二ヶ年の回答を合せて集計すると、総発送数1,705に対し有効回答数794となり、46.6%の回収率となった。

Ⅲ 結果および考察

(1) 練習生について

表1は、学年毎に男女別人数を求めたものを、未就学児、小学生、中学生に分類し、男女別に集計した結果である。

練習生の総数は38,708であり、うち女子が1,511名（3.9%）含まれていた。実態調査の観点から、全国の練習生総数を先の回答率から推計すると83,064名となる。これは、東京都の場合中学校の回答が若干数含まれるため厳密とはいえないが、中学でのいわゆる学校柔道の練習者を除く、社会体育としての柔道練習者が83,000人余りいることになる。

集計の結果をみると、未就学児、小学生、中学生の練習生はそれぞれ3.0%、75.3%、21.7%の比率となり、小学生が中学生の3倍強ある。これは学年数が2倍ということからすると解せない数値である。しかし、今回の調査だけでは断定はできないものの、次の二点がその原因として考えられる。まず、最近の各地での試合や練成大会への参加にみられるように、小学生における練習生が急増している点であり、第二には少年団活動などの主は小学生であり、中学生になると学校の柔道部で練習するようになり、社会体育の場から離れていくためである。特に後者については、柔道に限らずスポーツ少年団活動全般に亘ってみられる現象であり、原因の大半を占めると推察される。したがって、中学生になって練習生が激減するという結果は対象選択によるものであり、中学生における柔道人口そのものは必ずしも減少しているとはいえないであろう。

男女別にみると、女子の男子に対する比率は、全体では3.9%であるが、未就学児において7.8%とやや高いが小学生は3.9%、中学生は3.3%となり、学年が進むに従い練習生の減少傾向がみられる。中学生の比率については、全国調査で中学校を対象から除いているため、必ずしも女子の柔道人口を正確に反映したものとは思われない。すなわち、最近における女子選手権大会への参加者の増加にみられるように、中学校の柔道部や必修クラブで修行する女子生徒は年々増えているからである。

表2は、練習生の段級について、1級毎に人数を尋ねた結果を、式段、初段、1～3級、4～6級（無級を含む）に分けて集計したものである。回答の結果をそのまま集計したが、総数は表1と異なっていた。それぞれの比率は式段が0.2%、初段が4.9%、1～3級が33.2%、4～6級が61.7%となり、1級以下は初段以上（講道館で許可・登録された段位）のように必ずしも全国的に統一されたものとは言えないまでも、先にみた小学生が大部分を占めることを反映した結果といえよう。

週当たりの練習頻度について、指導している側（各施設や団体）の集計結果を表3に示した。週3日が37.2%と最も多く、次いで2日が30.6%となり、週1日だけというところも12.5%ある。週2日か3日の指導頻度というところが67.8%となり、大部分を占めている。この指導頻度の内容について、個々の回答にあたってみると、道場においてはその頻度が高く、体育館や公民館などを利用して行なわれる少年団活動では週一回だけの練習が多いという傾向がみられた。

表4は練習生の週当りの練習頻度をみたものであるが、やはり週3日が35.2%と一番多く、次いで2日の33.0%となっている。ここでも週1度というものが17.0%あり、練習生達の練習頻度は、ほぼ指導者側の指導頻度を反映した結果となっている。

次に、表5は各施設団体に一日の練習時間を尋ねた結果である。表に示すように、60分以内、61～90分、91～120分、121～150分、150分以上のそれぞれに分類して集計した。91～120分が最も多く37.0%、次いで61～90分が34.7%、60分以内が14.8%と続いている。120分（2時間）以上の練習時間というところが、合計13.5%もあるが、これは少年団などで二部練習などを行っているところが大部分であり、同一練習生が続けて2時間以上練習しているわけではなかった。練習全体の質と量の問題は、特に発育発達の途上にある児童・生徒にとって重要な問題といえるが、量的側面である練習時間については、おおよそ妥当な範囲でおこなわれているように思われる。

(2) 指導者について

柔道の指導者については、種目の特性上その資格や資質など種々の問題が考えられるが、今回の

表1 練習生数

N=38708 (%)

	未就学児	小学生	中学生	合計
男	1053 (92.2)	28000 (96.1)	8144 (96.7)	37197 (96.1)
女	89 (7.8)	1148 (3.9)	274 (3.3)	1511 (3.9)
計	1142 (3.0)	29148 (75.3)	8418 (21.7)	38780 (100)

表2 練習生の段・級

N=29081 (%)

	武 段	初 段	1～3級	4～6級	合計
男	63 (100)	1402 (99.1)	9439 (97.8)	16743 (93.3)	27647 (95.1)
女	0	13 (0.9)	210 (2.2)	1211 (6.7)	1434 (4.9)
計	63 (0.2)	1415 (4.9)	9649 (33.2)	17954 (61.7)	29081 (100)

表3 練習日数（指導者側）

N=793 (%)

7 日	6 日	5 日	4 日	3 日	2 日	1 日
4 (0.5)	41 (5.2)	45 (5.7)	66 (8.3)	295 (37.2)	243 (30.6)	99 (12.5)

表4 練習日数（練習生）

N=37741 (%)

	6 日	5 日	4 日	3 日	2 日	1 日
男	1662 (98.4)	1357 (97.6)	2368 (95.7)	12738 (95.8)	12020 (96.5)	6204 (96.5)
女	27 (1.6)	34 (2.7)	107 (4.3)	563 (4.2)	433 (3.5)	228 (3.5)
計	1689 (4.5)	1391 (3.7)	2475 (6.6)	13301 (35.2)	12453 (33.0)	6432 (17.0)

表5 1日の練習時間

N=786 (%)

～60分	61～90分	91～120分	121～150分	151分～
116 (14.8)	273 (34.7)	291 (37.0)	59 (7.5)	47 (6.0)

調査では実態把握の目的から、次の年齢層別人数、段位別人数、職業別人数などを尋ねた。各表ごとに総数が異なるのは、記入もれや無答が含まれるためである。

表6は指導者の年齢層別の人数をみたものである。各年齢層は10歳区切りとし、それぞれ該当の人数を求めたが、20歳代が26.5%、30歳代が32.6%、40歳代が25.1%、50歳代が9.1%、60歳代が4.9%、70歳代が1.8%となっており、20～30歳代が計59.1%と約6割を占め、20～40歳代だと計84.2%となり、若い指導者が大部分であることがわかる。

次に、表7はこれらの指導者の段位別人数を集計したものである。それぞれの比率をみると、参段が22.6%、弐段が18.7%、四段が16.7%、五段が15.4%、初段が11.6%、六段が8.6%、七段が2.9%、八段が2.0%、無段が1.5%という順になる。ここで、参段までをまとめると54.4%となり、さらに五段までをまとめると86.5%を占め、先の年齢層別人数の30歳代までの比率および40歳代までの比率とほぼ同様の結果であり、若い指導者が多い傾向を示しているといえる。

表8は指導者の職業について、自由記述式で職名を尋ね、その人数を求めた結果を集計したものである。集計に当っては、教員は公務員とは別枠で集計し、警察官は公務員に含めて集計した。また、自営業には商業、大工、左官、印房、電気工事、不動産業などを含め、自由業にはガードマン、土木建設、医者、植木師、運転手などと回答したものを含めて集計した。表からわかるように、指導者の職業は、自営業26.5%、会社員24.3%、公務員22.2%などが多い結果となっている。

(3) 指導計画について

表9は指導計画の立案実施について尋ねた結果である。年間計画を有すると答えたところが全体の50.1%あり、月間計画は31.4%、週間計画は14.9%であり、約半数の施設団体が年間計画を立てて指導を実施しているようである。なお、この項目の総回答数が1,053と、調査の有効回答数(794)

表6 指導者の年齢層

N=4900 (%)

20才代	30才代	40才代	50才代	60才代	70才代	合 計
1300(26.5)	1598(32.6)	1230(25.1)	447 (9.1)	238 (4.9)	87 (1.8)	4900

表7 指導者の段位

N=4991 (%)

無 段	初 段	弐 段	参 段	四 段
81 (1.5)	577 (11.6)	934 (18.7)	1129 (22.6)	833 (16.7)
五 段	六 段	七 段	八 段	合 計
767 (15.4)	428 (8.6)	144 (2.9)	98 (2.0)	4991

表8 指導者の職業

N=2778 (%)

公 務 員	自 営 業	会 社 員	教 員	整 復 師	自 由 業
617 (22.2)	737 (26.5)	675 (24.3)	137 (4.9)	155 (5.6)	263 (9.5)
道 場 主	団体職員	団体役員	学 生	そ の 他	
13 (0.4)	87 (3.1)	25 (0.9)	63 (2.3)	6 (0.3)	

を上回っているのは、重複回答があるためである。

次に指導当日の指導時間の配分についてみたのが表10である。練習の内容を準備運動や体力作りの時間、実際の練習、整理運動とに分け、それぞれについて何分くらい配当しているかを求めたものであり、全体の平均時間を表に示した。準備運動や体力作りの時間は24.9分、実際の練習の時間が62.1分、整理運動の時間が11.7分となり、その比率はそれぞれ25.2%、62.9%、11.9%となっている。

続いて表11～13はそれぞれの練習内容について、各施設団体がどの程度の時間を配分しているかを、10分きざみに集計したものである。

表11は準備運動や体力作りの時間である。平均は24.9分であったが、11～20分が38.5%、21～30分が34.5%であり、大部分のところが30分以内(86.5%)であることがわかる。

表12は実際の練習時間の配分である。平均は62.1分であったが、51～60分のところが27.2%と最も多く、41～50分のところが15.8%と続いている。なお、90分以上のところが計8.7%あるが、これは先にも述べたように二部練習(対象の生徒は入れ替る)をおこなうところなどがあるためであ

表9 指導計画の立案実施

N=1053 (%)

① 年間計画	② 月間計画	③ 週間計画	無 答
528 (50.1)	331 (31.4)	157 (14.9)	37 (3.6)

表10 指導時間

単位：分

	準備運動や体力作り	実際の練習	整理運動
平均時間	24.9 (無答14)	62.1 (無答19)	11.7 (無答23)

表11 準備運動や体力作りの時間

N=785 (%)

1～10分	11～20分	21～30分	31～40分	41～50分	51～60分
106 (13.5)	302 (38.5)	270 (34.5)	67 (8.5)	20 (2.5)	20 (2.5)

表12 実際の練習時間

N=772 (%)

11～20分	21～30分	31～40分	41～50分	51～60分	61～70分
10 (1.3)	56 (7.3)	103 (13.3)	122 (15.8)	210 (27.2)	64 (8.3)

71～80分	81～90分	91～100分	101～110分	111～120分	121分～
69 (8.9)	71 (9.2)	32 (4.1)	8 (1.1)	16 (2.1)	11 (1.4)

表13 整理運動の時間

N=762 (%)

1～10分	11～20分	21～30分	31分～
521 (68.4)	187 (24.5)	51 (6.7)	3 (0.4)

る。

表13は整理運動の時間である。平均は11.7分であるが、1～10分のところが68.4%とほとんどのところが10分以内であることがわかる。

次に指導計画のうち指導形態について、指導の際のクラス分けの有無を尋ねたのが表14である。クラス分けをして指導しているところが77.8%と、全体の8割弱がクラス分けを実施している。生徒人数の規模によってもクラス分けの必要性は異なるが、発育発達段階に大きな差がある少年柔道においては、その必要性は大きいといえ、この結果はそれを裏付けるものと思われる。

また、そのクラス分けの方法について回答を求めた結果を表15に示した。学年別43.3%、年齢別31.2%が大半を占め、熟練度や段級別によるクラス分けは少数となっており、柔道の技能より身体の発育発達に則したやり方が中心になっているといえる。

(4) 指導内容について

技の指導をおこなう場合、どのような順序で教えていくかが問題となるが、表16は手技、腰技、足技、固技の別にそれぞれ指導順に1番から回答を求めた結果である。表には1番目から4番目までそれぞれの順位のうち最も指導されることの多い技名を示したので、手技の2、3番目に同じ体落が並ぶような結果となっている。1番目に指導される技で最も多いものは、それぞれ背負投、払腰、大外刈、袈裟固となり、2番目以下も表に示すとおりであるが、一定の指導順序のパターンはほとんどみられなかった。

この項の集計に当り、1979年度の東京都内の調査では単に技の指導順序を1番から順に記入してもらう方式をとったが、結果は配列の仕方が千差万別であり、1980年度の調査ではあえて表に示すような手技、腰技、足技、固技の別にそれぞれ指導順位を回答してもらうように変えている。それ

表14 指 導 形 態

N=790 (%)

クラス分けしている	クラス分けしていない
615 (77.8)	175 (22.2)

表15 クラス分けの仕方

N=615 (%)

学 年 別	年 齢 別	熟 練 度	段 級 別	体 力 別	そ の 他	無 答
266 (43.3)	192 (31.2)	45 (7.3)	25 (4.1)	10 (1.6)	50 (8.1)	27 (4.4)

※その他はクラス分けの仕方が2種以上の組み合わせによるもの。

- | | |
|----------------|---------------------|
| 1. 体力別・技術別 (9) | 7. 学年別・年齢別 (2) |
| 2. 体力別・年齢別 (5) | 8. 年齢別・級 別 (1) |
| 3. 年齢別・技術別 (5) | 9. 年齢別・技術別・体力別 (5) |
| 4. 学年別・技術別 (4) | 10. 学年別・級別・対外試合 (1) |
| 5. 学年別・級 別 (4) | 11. 気 力 (1) |
| 6. 学年別・体力別 (2) | 12. 級 別・体重別 (1) |

にもかかわらず、結果からは指導順序の一定のパターンはみられなかった。そこで、指導順位に関係なく、上位に指導される頻度の高い順に1番から10番までを集計したものが表17である。上位3番までをみると、手技では背負投、体落、一本背負であり、腰技では払腰、大腰、釣込腰、足技では大外刈、大内刈、小内刈、固技では袈裟固、上四方固、横四方固の順である。これをみてわかるのは、必ずしも技の難易度や安全度を考慮した結果の指導順とはいえない傾向が表われていることである。例えば、手技の1番目背負投は、試合や練習でよく使われ、小さい者が大きい相手を投げるなど身体の比較的小さい者に好まれる技であり、いわゆる大技の部類に属するが、筋力の弱い者は相手を背負った時、脚で支え切れなくなり同体で前に倒れ、相手が顔や頭部を畳に打ちつける危険性もあり、指導に際しては注意が必要とされる技でもある。また、腰技の1番目払腰についても、片脚で自分と相手の体重を支え、他の脚で払って投げるため、背負投と同様に脚力の弱い者にとっては難しい技といえる。

ちなみに、講道館で制定されている投げ技についての指導順を示した「五教の技」では、背負投は第一教（出足払、膝車、支釣込足、浮腰、大外刈、大腰、大内刈、背負投）の第8番目に指導される技であり、五教でも手技としては第1番目といえるが、既に七つの技を練習した後に指導される技とされている点が注目されよう。また、払腰は第二教（小外刈、小内刈、腰車、釣込腰、送足払、体落、払腰、内股）の第7番目に位置づけられ、かなり練習を積んだ後で指導されることがわかる。なお、大外刈についても第一教の第5番目であり、足技としても4番目に位置づけられている点が注目される。

表18は、形の指導について回答を求めた結果である。時間帯を設けて指導しているところが28.1％、実技と関連づけて指導しているところが39.8％、計67.9％が何らかの方法で形を指導しており、

表16 技 の 指 導 順 序

	1	2	3	4
手技	背 負 投 (584)	体 落 (324)	体 落 (45)	肩 車 (25)
腰技	払 腰 (237)	払 腰 (209)	釣 込 腰 (116)	釣 込 腰 (28)
足技	大 外 刈 (199)	大 内 刈 (169)	小 内 刈 (138)	大 内 刈 (92)
固技	袈 裟 固 (625)	上 四 方 固 (254)	横 四 方 固 (249)	肩 固 (94)

表17 技 の 指 導 頻 度

	1	2	3	4	5
手技	背 負 投 (704)	体 落 (461)	一本背負 (126)	肩 車 (75)	浮 落 (70)
腰技	払 腰 (546)	大 腰 (352)	釣 込 腰 (331)	浮 腰 (215)	跳 腰 (143)
足技	大 外 刈 (498)	大 内 刈 (452)	小 内 刈 (345)	送 足 払 (266)	支釣込足 (247)
固技	袈 裟 固 (702)	上 四 方 固 (572)	横 四 方 固 (556)	肩 固 (251)	縦 四 方 固 (147)

	6	7	8	9	10
手技	すくい投 (9)	双 手 刈 (8)	背 負 落 (3)	隅 落 (2)	引 落 (1)
腰技	移 腰 (28)	腰 車 (17)	釣 腰 (5)	腰 投 (3)	後 腰 (2)
足技	内 股 (213)	出 足 払 (195)	膝 車 (178)	足 払 (90)	小 外 刈 (42)
固技	十 字 固 (10)	腕 絨 (1)			

表18 形 の 指 導

N=903 (%)

① 時間帯を設けて指導している	254 (28.1)
② 実技と形とを関連づけて指導している	359 (39.8)
③ とくに形の指導はしていない	277 (30.7)
無 答	13 (1.4)

形の指導は特別していない30.7%を大きく上回っている。

(5) 施設について

表19は道場が専用か兼用かについての結果であり、専用のところが69.9%、兼用が29.3%である。全体の約7割が専用の道場において指導がおこなわれている。

次に、緩衝用のスプリングの有無についての結果を表20に示した。39.4%がスプリングを有し、52.0%がスプリングの無い道場となっているが、無答(8.6%)をスプリングの無い道場に含めると、約4割がスプリングの有る道場で指導が行われ、約6割はスプリングのない道場での指導といえる。この結果は、上記の専用、兼用両道場を含むものなので、専用道場と答えたところにスプリングの有無の結果をあてはめると、56.3%がスプリングを有する道場ということになる。

表21は道場の広さについて、畳の枚数で回答を求めた結果であり、10枚区切りに集計し、100枚以上のところは50枚毎に集計した。対象が個人経営の道場から体育館や警察署を使用して行われる少年団や柔道教室などと多様なため、道場の広さも多様である。目安となる50枚毎にみると、50枚以下のところが46.6%、51～100枚のところが39.2%、100枚以上が14.2%となる。道場の広さについては、単に畳数が多い少ないによるのではなく、畳数とそこで一度に練習する人数によって決るといえる。先にみた(1)練習生について、のところの各施設団体の生徒数と畳数を対比させれば、一人当たり何畳になるかわかるが、今回は基礎的な実態調査であり、対象も目的や規模の多様な施設団体であるので、あえて人数と畳数とのクロス集計はおこなわなかった。

最後に、表22、23は道場の附属施設についての結果を示したものである。専用の更衣室は54.8%が有し、シャワー設備は49.7%が所有すると回答している。これも全体の平均としての附属施設の結果であり、対象により体育館などでは更衣室、シャワーとも8割方が設備されている状況にあり、

表19 道 場

N=795 (%)

専 用	兼 用	無 答
556 (69.9)	233 (29.3)	6 (0.8)

表20 ス プ リ ン グ

N=794 (%)

有	無	無 答
313 (39.4)	413 (52.0)	68 (8.6)

表21 道 場 の 広 さ

N=778 (%)

1～10枚	11～20枚	21～30枚	31～40枚	41～50枚	51～60枚	61～70枚
0	17 (2.2)	99 (12.7)	113 (14.5)	134 (17.2)	83 (10.7)	61 (7.8)
71～80枚	81～90枚	91～100枚	101～150枚	151～200枚	200枚～	
73 (9.4)	28 (3.6)	60 (7.7)	69 (8.9)	25 (3.2)	16 (2.1)	

表22 更 衣 室

N=777 (%)

有	無	無 答
426 (54.8)	335 (43.1)	16 (2.1)

表23 シ ャ ワ ー

N=794 (%)

有	無	無 答
395 (49.7)	379 (47.7)	20 (2.6)

施設の充実がうかがわれた。

IV まとめ

少年柔道の研究に当り、基礎的研究として少年柔道の実態調査を企画し、1979年度の東京都内の調査から、1980年度の全国規模の調査に発展させて行い、現段階における一応の傾向を把握することができた。

今回の調査では現状把握にとどまったが、例えば指導内容の項における、技の指導順序の配列などにおいて、子供の発育発達を十分考慮した指導計画がなされているかどうかという疑問点もみられ、さらに詳しい調査の必要性が示唆された。

今後はこの結果をもとに、指導方法や指導の実際に結びつく研究を行い、少年柔道の発展充実に資する資料を得るよう努めるべきものと考えられる。

少年柔道に関する調査

講道館柔道科学研究会
少年柔道研究班

本調査の結果については、資料の整理、検討の結果後日皆様のお手元にお送り致したいと考えております。

1. 練習生について

- 1) 昭和55年1月現在の少年柔道練習生数をお答え下さい。
-
- (中学3年生までを少年柔道練習生として考えて下さい)

男 名 女 名

- 3) 上記の練習生の段級についてお答え下さい。

段級	男	女
式 段	名	名
初 段	名	名
1 級	名	名
2 級	名	名
3 級	名	名
4 級	名	名
5 級	名	名
無 級	名	名

- 4) 練習日についてお答え下さい。

- ① 練習は週のうち何日間行っていますか。また、その時間は何時から何時までですか。

 日間 時 分から 時
 分まで

2. 指導者についてお答え下さい

- 1) 指導を担当している指導者は何名いますか。

 名

- 2) 上記指導者の年齢についてお答え下さい。
-
- (各年齢層毎に該当する人数を記入して下さい)

20才代	30才代	40才代	50才代	60才代	70才代
名	名	名	名	名	名

- 3) 上記指導者の段位についてお答え下さい。

無段	初段	二段	三段	四段	五段	六段	七段	八段
名	名	名	名	名	名	名	名	名

3. 指導計画についてお答え下さい

- 1) 指導計画の立案実施について例えば下記のように実施されている場合は、該当欄に○印をつけて下さい。

- ① 年間の指導計画がある
- ② 月間の指導計画がある
- ③ 週間の指導計画がある

- 3) 指導形態についてお答え下さい。

- ① 練習生の年齢や体力・技術などに応じてクラス分けして指導していますか。(該当に○印をつけて下さい)

 いる いない

4. 指導内容についてお答え下さい

- 1) 指導している技についておおよその指導順序に従って下記に記して下さい。

(例) 1. 足払 2. 膝車 3. けさ固……………

1. 2. 3. 4.
5. 6. 7. 8.
9. 10. 11. 12.
13. 14. 15. 16.
17. 18. 19. 20.

5. 施設について (該当欄に○印または数字を記入して下さい)

- 1) 道場は専用ですか、兼用ですか
-
- 専用
-
- 兼用

- 2) 専用道場の場合スプリングが入っていますか
-
- 有
-
- 無

- 3) 道場(練習場)の広さは畳何枚の広さがありますか
-
- 畳

- 4) 更衣室が特別にありますか
-
- 有
-
- 無

- 5) シャワーの設備がありますか
-
- 有
-
- 無

- 2) 上記の練習生の学年についてお答え下さい。

学 年	男	女
中学校	3年 名	3年 名
	2年 名	2年 名
	1年 名	1年 名
小学校	6年 名	6年 名
	5年 名	5年 名
	4年 名	4年 名
	3年 名	3年 名
	2年 名	2年 名
	1年 名	1年 名
未就学児	名	名

- ② 練習生は週何日間練習を行っていますか。

(日数の多い順に練習者の人数でお答え下さい)

練習日	男	女
6日	名	名
5日	名	名
4日	名	名
3日	名	名
2日	名	名
1日	名	名

注)毎日練習している場合は6日となり、週1回の練習では1日となります。

- 4) 左記指導者の主たる職業について下記欄に記入して下さい。

----------------------	----------------------	----------------------	----------------------

(例)会社員
地方公務員

- 2) 指導当日の計画と実施について実施している場合は、その時間(分)を記入して下さい。

- ① 準備運動や体力づくりの時間 分
- ② 実際の練習時間 分
- ③ 整理運動の時間 分

- ② いると答えた場合その区分けの仕方を下記に記入して下さい。
-
- (例) 年齢による。○才以下と○才以上。

- 2) 形の指導について、該当欄に○印をつけて下さい。

- ① 時間帯を設けて指導している
- ② 実技と形とを関連づけて指導している
- ③ とくに形の指導はしていない

所在地	
道場名 (団体名)	
責任者氏名	

御協力ありがとうございました。